分散と組織化の界面としての身体
――デリダにおける Leiblichkeit 解釈について――

小川　歩人

はじめに

語源的に生を含意するLeibは、現象学的明証性の根本として「生き生きした現在」を批判したデリダにとって問題含みの主題にみえる。Leibはしばしば「固有の身体〔corps propre〕」と訳されるが[1)]、デリダにとって「固有性〔propriété〕」はしばしば自己同一性、真理を目指す現前の形而上学が孕む一形象として最初期の著作から批判の対象になっていた。例えば、1965年にテル・ケル誌に掲載されたアルトー論「息を吹き入れられた言葉」では固有の身体、その清潔さ＝固有性を保持しようとするアルトーが現前の形而上学の圏域にあるものとして批判されている[2)]。

しかし、デリダにとって、Leiblichkeitという問題設定自体は1962年の「幾何学の起源」序説（以下、「序説」と略記）以降、晩年に至るまで絶えず両義的なものであり続けていた。例えば、80年代以降、「ゲシュレヒト、性的差異、存在論的差異」（1983, 以下、「ゲシュレヒトⅠ」と略記）といったテクストのなかで性的差異といったモチーフとともに身体性があつかわれることを鑑みた際、Leibという主題系を単純に批判的対象として理解することは難しくなってくる。

本論文では上述の観点から、固有性批判から離れて身体＝物体の問題を取り出すために、1960年代のフッサール論「序説」、『声と現象』および1980年代のハイデガー解釈「ゲシュレヒトⅠ」[3)]を検討する。まずデリダがフッサールのエクリチュール論に見出したKörperとLeibの重なり合いを確認する。次いで『声と現象』へ向かう際に見出されるフッサールによるGeistとLeibの分離に抗して、事実性と超越論性とのあいだでLeiblichkeitの問題が立ち現れていることを検討する。そして、Leiblichkeitの問題系が1980年代以降のハイデガー論に引き継がれ、分散と組織化の両義的な界面として機能していることを示す[4)]。

1．幾何学とエクリチュール

『幾何学の起源』における大きな主題は幾何学を範例とした客観的理念性の発生であった。まずフッサールが理論構築を目指した範例としての幾何学的理念性について、本論に関係する範囲で確認しておこう。

第一に、客観的理念性は常に、誰にとっても同じものとして考えられる。理念性の中でもとりわけ数学的理念性が優先的範例として機能しているが、それは幾何学的対象が常にあらゆる人にとって、いかなる時においても同じものであるからである。例えば、「最も早い輸送機関は電車である」という命題は2015年においては誤りである。しかし、「三角形の内角の和は180度である」は1910年でも2015年でも常に正しい。幾何学的対象の絶対的同一性は、フッサールが構築しようとした

客観的理念性の特徴をあらわしている[5)]。

第二に、フッサールにとって、あらゆる客観的理念性は具体的な意識の活動によって産出されねばならないものである。ここで、わたしたちは数学的対象をめぐるフッサールの「産出〔production〕」とカントの「啓示〔révélation〕」の議論を参照することでフッサールの議論の特徴をとらえることができるだろう（IOG22-23/35）。カントにとって、数学的対象は純粋形式としての直観に「与えられる」ものである。それゆえ、「最初の幾何学者は、自らの数学者としての活動のためには既に所有している観念の内面にとどまりさえすれば良いという自覚をもつにすぎない」（IOG22-23/35）。しかし、フッサールにとって、カントの態度は不十分である。幾何学的対象は直観に単に与えられることはない。幾何学的対象は幾何学者たちによって志向的充実をともなってつくりだされなければならない、つまり「この直観が思念する対象ないしは対象性はこの直観以前には存在」せず、わたしたちは「三角形の内角の和は180度である」という真理をつくりださねばならなかったのである（IOG22-23/35）。

また、この産出の必然性ゆえに、幾何学的理念性は「常に」という超時間性あるいは単なる感性的諸対象と区別される無時間性をもつものの、それは汎時間性と解されるべきものでもある（IOG164-165/244-255）。フッサールは幾何学の客観的理念性の無限の同一性を考えようとしたのだが、その際、プラトン的な理念性のように他の世界にある超越的対象であることを禁じるのである。

さて、フッサールは以上のような特徴を持つ幾何学的理念性を獲得するためには幾何学的真理が間主観的共同体の内部で伝達可能でなければならないと考えていた。それには二つの理由がある。

まず、それは第一に客観性の問題と関わる。ある幾何学者の主観的明証性において生産される幾何学的真理は伝達されなければ単に個別的なものでしかない。というのも間主観的共同体のなかで共有されうることこそ普遍的なものの条件であるからだ。幾何学的真理は、誰にとっても同じであり、幾何学者が生きた有限な期間を越えて存続しなければならないのである。

次に本源的志向の問題がある。フッサールにとって、幾何学的真理は幾何学者によって明証性の源泉である本源的志向を伴って、生産されなければならなかった。しかし、もし人々がその起源における本源的志向を忘却してしまったのであれば、この生産の意味は失われてしまう。それゆえに、フッサールは最初の産出活動がもっていた創設的意味に立ち戻る必要がある、つまり、創設的起源への通時的な「問い返し〔Rückfrage〕」[6)]（IOG36/47）が必須だと考えたのである。

フッサールは、ここで書かれた文字つまり「エクリチュール」の可能性を必要とした。なぜか。それはエクリチュールがわれわれに幾何学的真理の内容を他の主体へと伝達し、更に共時的伝達のみならず、通時的な伝達をも可能にするからである。ゆえに、フッサールはエクリチュールを「潜在的な伝達」と呼び、それが幾何学的真理に「存続する存在〔être-à-perpétuité〕」、「絶えることのない現存〔présence perdurante〕」（IOG83/132）を与え、その客観的理念性を保証するために必須なのであると記述したのである。

ただし、デリダはフッサールが必要としたエクリチュールの水準の曖昧さを強調する（IOG84/133）。ここにフッサールの企図が決定的に汚染されてしまう契機があるのだ。エクリチュ

ールを必要とするということは、同時に感性的な事実的事物が幾何学的理念性の構成の過程に組み込まれるということを意味する。つまり、エクリチュールは、単なる感性的物体としてのKörper〔un corps sensible〕であるというだけでなく、幾何学的真理を構成する身体としてのLeib〔un corps propre〕でもあるため（IOG97/144）、「客観性の保証である文字記号は事実上毀損することもありえる」（IOG92/139）のであり、その事実的偶然性によって幾何学的真理の汎時間的な存在が脅かされるのである。フッサールはKörperとしてのエクリチュールの危険な事実性を還元し、権利上、「真理のいま–ここの志向的原本性」を救うことができると信じていた。しかし、デリダはやはり「もし文書が事実的出来事であると同時に意味の湧出でもあるなら［……］いかにしてそれはその身体性〔Leiblichkeit〕を物体的災害〔un désastre corporel〕から救うのだろうか」と問う（IOG97/144）。ここに事実と権利、感性的なものと理念的なものが混交してしまう地帯が存在するのであり、デリダは「KörperとLeib、物体〔corps〕と肉体〔chair〕は［……］事実上ただ一つの同じ存在者」（IOG98/145）であるという事実へ目を向け反論する。最初期のデリダの議論において、エクリチュールのLeiblichkeitはフッサールの理念的対象の発生に関する理論を完成すると同時に毀損する両義的役割を担わされているのである。

2． Körper, Leib, Geist

ただし、デリダは、これ以降フッサールがこの両義性を維持するのではなく、むしろ解体し、理念性を構築しうる純粋な志向性を抽出しようとすることに注目する。フッサールにとって問題はあくまで「KörperをLeibへと構成し、これをそのLeiblichkeitにおいて、その生きた真理意味において維持する志向的作用」であり、「もはや物体Körperをそのものとしては必要としない」（IOG98/144-155）。「生気づけられた固有の身体〔du corps propre animé〕、la geistige Leiblichkeitの志向的次元」、より正確には「あらゆる事実的物体性〔toute corporéité factice〕を排除したLeibの精神性Geistigkeit」の水準が問題なのである（IOG98/145）。

さて、ここでデリダは、フッサールの議論を追いながら、KörperとLeibの両義性を跨ぎ越す、ある種の精神性、Geistigkeitへ注目している。このデリダの最初期の整理は1960年代後半の議論においてさらに明確化される。デリダは1967年の『声と現象』においても序説でみられたようなKörperとLeibとの比較をおこなっており、それに伴って「音響物質」や「物理的音声」、「世界のうちの声の身体＝物体〔corps〕」に対して、「現象学的声」、「超越論的な肉における声」、「息吹〔souffle〕」が対置される（VP15/32）。ただし、ここでは「序説」からさらに踏み込んで、志向的生気づけをおこなう精神性が区別されるのである。「語が何かを意味する身体＝物体〔corps〕となるのは、アクチュエルな志向がそれを生気づけ、生気のない音響の状態〔l'état de sonorité inerte〕（Körper）から生気づけられた身体の状態〔l'état de corps animé〕（Leib）へ移行させる場合だけである」（VP91/180-181）が、しかし、「GeistigekeitあるいはLebendigkeitだけは独立的であり、根源的」なのだ（VP91/181）。エクリチュールや声を賦活するGeistigkeit（とLebendigkeit）の根源性は、身体＝物体から独立したものである。そこではLeiblichkeitがもっていた曖昧さが濾過され、「Geistによる純粋な生気づけ」（VP37/77）へと純化されてしまう。

整理しよう。1960年代のデリダにとってLeibという主題は、単なる物質Körper、身体Leib、精神Geistという三分類が問題となる。そして、精神は、ここで単に経験的、事実的な偶発性を含みこむ物質としてのKörperを志向的に賦活し、Leibとすることで、理念的な意味の構築、現象学的明証性を反映するロゴスへと安定化させているようにみえる。しかしながら、Körperと絡み合うLeibの可能性は、実際にはGeistの統制の下で還元されてしまっているのである。デリダはむしろ事実性と超越論性が重なり合う身体性の曖昧さからフッサールの純粋主義を批判していくのだ。

3． 中性性と性的差異

前節まででデリダによる1960年代のフッサール読解を検討したが、本節では「ゲシュレヒトⅠ」のハイデガー読解をとりあつかう。『存在と時間』出版以後、ハイデガーは1928年夏学期講義において現存在の身体性の問題を提起しており、「ゲシュレヒトⅠ」はその講義がおさめられた『論理学の形而上学的な始原諸根拠』（以下、『論理学』と略記）の第10節「超越の問題、および『存在と時間』の問題」に注目した論考である[7]。ここでのハイデガーの記述は『存在と時間』をほぼ踏襲するものである。まず「存在の理解」が形而上学一般の根本問題を形成しているとし、それについて明らかにするために現存在の存在様式を明らかにしようとする。そして、その準備的な分析のために導入的諸命題を提示するのである。ハイデガーにおいてLeiblichkeitが問題となるのは第10節の第6命題だが、デリダの議論を追うためにさしあたり必要な範囲でそれまでの論旨を概観しよう。

まずデリダはハイデガーが分析に際して、現存在の「中性性〔la neutralité〕」を強調していることを指摘している（PSY399/126Ⅰ）。これについては『存在と時間』においてなされた「現存在」という術語の選定と同様の理由であると言えるが、デリダがことさらに注目するのは第一の主導原理である「中性性」から第2命題で主張される「ある種の無性性〔une certain *asexualité*〕（*Geschlechtslosigkeit*）」への飛躍である。

> 「現存在」という標語の独特の中立性は、この存在者の学的解釈が一切の事実的な具体相に先んじて成し遂げられねばならないがゆえに、本質的なものである。またこの中立性は、現存在が両性のいずれにも所属しない〔keines von beiden Geschlechtern ist〕ことを意味している。しかしこうした性のないことは内容空虚なるものの無差別ではないし、無差別的で存在的な無の、その弱い否定性でもない。中立性における現存在は、無差別的に誰でもなく誰でもある、というのではない。むしろそれは本質の根源的な積極性と力強さである（ML171-172/186, 下線部強調は引用者）。

ハイデガーが現存在の中性性に次いで述べるのは、現存在の中性化の事実的相に対する先行性である。デリダが指摘するように、中性性が本質的であるのは、ハイデガーにとって現存在の中性化がまず諸々の事実的具体相より以前に、その外でされねばならなかったからである[8]。

ただしデリダはここでなぜ性的差異を他の数多くの中性化すべき諸規定があるにもかかわら

ず、まず最初に排除せねばならなかったのかと問う（PSY399/127Ⅰ）。ここでデリダが強調するのは、ハイデガーが記述する現存在の無—性的中性性は「セクシュアリティそれ自体〔*la sexualité même*〕」の排除を目的とするのではなく、「性的二元性〔la *dualité sexuelle*〕」の諸特徴こそが問題なのだということである（PSY402/130Ⅰ）。それゆえ、デリダによれば「現存在は、そのものとしては、両性のいずれにも属さないとはいえ、しかしこれは、現存在が性を奪われているという意味ではない」のだ（PSY401/130Ⅰ）。むしろ、デリダはハイデガーが「前差異的な、あるいはむしろ前両数的なセクシュアリティ」、「一対性よりも根源的なセクシュアリティ」の「積極性」と「力強さ」を想定しうることを示唆する（PSY401/130Ⅰ）。

デリダの強調点は何か。それは根源的な分散性を忌避し、排除しようとするハイデガーの傾向であり、そのような態度をデリダは性的二元性の排除にみているのである。この議論は前節までで確認した事実性、身体性を還元しようとするフッサールの態度と並行的である。ただし、フッサールが明確に身体性ではなく、理念的な意味を構築する精神性をとりだそうとしていたのに対して、ハイデガーの態度はより慎重である。というのも、ここでハイデガーは、アレーテイアという彼の思索の根本語[9]と同様にこの「無性性」という、ある種の「存在論的否定性」が否定的な価値付けを帯びていないと主張しているからだ。さらに、ハイデガーによれば、このようなセクシュアリティの積極的かつ力強い源泉としての無性性は、単一的、同質的、無差別であることを必ずしも意味しない（ML172/186）。ここでデリダの立場は極めて微妙である。というのも、この論考の末尾で二元性に制限されない性的差異、否定性のない性的差異を考えようとしており（PSY414/198-199Ⅰ）、ここでハイデガーが想定しようとする無性性に論理的に近づいているようにみえるからだ。しかし、その後のハイデガーの記述においても「性的」（sexual, sexuell, geschlechtlich）といった形容詞が徹底的に避けられていることの含意をデリダは問題視しようとするのだ[10]。

4．組織化と分散の界面としての身体性

さて、ハイデガーにおいてLeiblichkeitが問題となるのは第6命題であり、彼は『存在と時間』で扱わなかった身体性をその事実的散乱 faktische Zerstreuung との関係から論じている。

> 現存在一般は身体性〔Leiblichkeit〕への、そしてそれとともに性別〔Geschlechtlichkeit〕への事実的な散乱〔die faktische Zerstreuung〕への内的な可能性を宿している。現存在として最も内的な仕方で孤立化された人間のその形而上学的中立性は、［……］根源の本来的に具体的なもの〔das eigentlich Konkrete des Ursprung〕であり、事実的な分散がまだ—ないということである。［……］現存在は、事実的なものとしてはそれぞれとくに一個の身体のなかへ〔in einen Leib〕まき散らされており、それに伴ってとくにそれぞれ特定の性別へ分裂している［……］（ML175/187）。

該当部分において散乱 Zerstreuung は極めて多義的かつ抽象的な水準で語られているが、ここで身体性にかかわる散乱にかんしてデリダの論点を整理しよう。

第一に、Leiblichkeitと性的差異の分離である。ここでデリダはハイデガーの意図を性的差異が「固有な身体のセクシュアリティ」に基づくのではなく、Leiblichkeitつまり性的差異以前の「固有な身体それ自身〔le corps propre lui-même〕」に基づくという主張だと指摘する（PSY405/189Ⅱ）。

第二に、Leiblichkeitの「一つの組織化要因〔un facteur d'organisation〕」という規定である。デリダはハイデガーにとって無性性的な中性性が否定性をもたないのと同様に、身体性によって導入される散乱Zerstreuungも否定的な意味で解されないと主張している。というのも、デリダによれば、ここでハイデガーの主眼は、多くの個別的なものに分裂させられるということではなく、中性的な現存在が「多様化〔Mannigfaltigung〕」していく、その内的可能性を見定めることであるからだ。そしてそれゆえに、この多様化に際して、現存在の固有の身体が「一つの組織化要因」とみなされるのである（PSY406/190Ⅱ）。

> 現存在は一個の身体に割りふられ、おのれの事実性のうちで分け隔てられ、散乱と分散（zersplittert）に服させられ、そしてまさにそのために（ineins damit）つねにセクシュアリティによって統一を破られ、食い違いを生じさせられ、裂け目を入れられ、分割されて（zwiespältig）、特定の性へと向かう（in eine bestimmte Geschlechtlichkeit）。たしかに、散乱〔dissémination〕、分散〔dispersion〕、分割〔éparpillement〕、分裂〔diffusion〕、Zersplitterung、Zerspaltungといったこれらの語は、ちょうど《Zerstörung》（解体、破壊）と同じように、さしあたりは<u>一つの否定的な響き</u>をもつ、とハイデガーははっきり言っている。存在的観点からすれば、この響きは否定的な諸概念に結びつく。これは直ちに価値下げ的な意味合いを生じる。「しかし、ここで問題にされているのはまったく別のことである。」［……］問題はむしろ［……］多様化の内的可能性を解明することにあるのであって、この多様化の観点からみるとき、現存在の固有な身体は一つの「組織化要因」をなすのである（PSY406/190Ⅱ. 下線部強調は引用者）。

第三に、根源的な散在、Streuungについてである。ハイデガーは、この多様化が単なる形式的多数性ではなく、存在そのものに属したうえで、さらに「ある根源的な散在〔ursprüngliche Streuung〕」が現存在一般の存在に、すなわち「形而上学に中性的なその概念に即して言われる現存在の存在にすでに属している」と述べる（ML175/187）。ハイデガーによる根源的な散在Streuungと、或るまったく特定の観点からみた場合の散乱Zerstreuungとの区別[11]に関して、デリダはこのStreuungがZerstreuungのもつあらゆる意味合い（dissémination, dispersion, éparpillement, diffusion, distraction）にしたがって限定されるのだと述べる（PSY407/190Ⅱ）。しかし、デリダはそのようなハイデガーの挙措に分散的なものを根源におくことの忌避、また根源的な統一性に対する価値づけをみている。ハイデガーにおいて、二元的差異としての性的差異を導入するところの身体はあくまで「一つ」の組織化要因であり、原初的な差異、裂け目は「一つの」身体において一挙に集約させられている。また、根源的散在であるStreuungはZer-という否定的な響きを担わない。このようなハイデガーの挙措にデリダは、ハイデガーが「純粋な根源的可能性」であるStreuungとその堕落

としてのZerstreuungという論理を温存しているのではないかと問うのだ。

> しかしながら否定性によるある種の汚染をさけることは、それどころかそのような散乱をあの純粋な根源的可能性（Streuung）――これはそのようにして一つの代補的な言い回しによって影響されているように思われるのだが――の頽落ないしは堕落に結びつけるにいたるような［……］汚染を避けることは、たとえその汚染が厳密には正当でないとしても、難しいことである（PSY407/190-191Ⅱ）。

整理しよう。ハイデガーにとって二元的差異としての性的差異を導入するところの「身体性」は、あくまで「一つ」の組織化要因、「一つの」身体とみなされることで、原初的な差異、裂け目を一挙に集約する役目を担わされている。しかし、デリダは身体性それ自体から性的差異を排除しようとするハイデガーの挙措に、事実性と超越論性の界面としての身体性が孕む両義性を排除しようとする身振りをみてとるだろう。

ここでのデリダのハイデガー読解はかなり強引にみえる。ハイデガーは自身の議論がそもそも両義性を含み、そのような多様な論点を踏まえた上で、そこに理論的ヒエラルキーを介在させず分析をおこなおうとしているだろう。にもかかわらず、デリダはハイデガーがそこに自身の理論的価値づけを導入しているのではないかと執拗に問いかけているのである[12)]。

確かにこの箇所を単体で扱った場合には、この強引な読みに対する疑義は出てきて当然のものであるだろう。しかし、「ゲシュレヒト」論考の発表の後に出版された『ツォリコーンゼミナール』（1987）において、ハイデガーは再び身体性をとりあげているが、その論旨はこのデリダの読解方針を更に補強するものである。ハイデガーは、そこで身体性以前の現存在の根源的な「空間を開ける〔einräumend〕」という性質、つまり根源的な「一つ」の空間性を身体的多様化に対して優先的なものとして語るのである[13)]（ZS105/117）。Streuungの可能性がさしあたりは前提とされていたが、しかし、その奥には一つの根源的な空間性が想定されていたのである。このような傾向について、デリダはこれ以後も執拗にハイデガーを批判していく。そして、その際に身体性は大きな介入の糸口となっていたのである。

5．結論

まとめよう。まずデリダは最初期の著作において、理念的対象を構成するエクリチュールにKörperとLeibが事実的両義性のなかで重なり合う事態をみいだした。そして、フッサールがLeiblichkeitの物体性を還元し、理念的同一性を構成する精神性に純化していくことへのデリダによる批判を確認した。次いで「ゲシュレヒトⅠ」を検討し、デリダがLeiblichkeitを梃子にハイデガーに内在している起源的一性へ向かう傾向に抗して、事実的散在の方向性を際立たせようとしていることを取り上げた[14)]。そして、そこにおいては現存在の一つの組織化の要因であると同時に散在の契機でもあるLeiblichkeitの位置づけが明らかとなった。根源的な離散性、分散性を強調しつつも、デリダはあくまで組織化、理念化との関係において、自身の思考を練り上げようとしていた。そし

て、デリダは分散と組織化の両極的運動の最中で、Leiblichkeit という「界面 surfaces」を記述しようとするのである[15)]。

また、デリダによる Leiblichkeit という主題は、『幾何学の起源』の段階では、エクリチュール論という外観をとることで、単に言語論的枠組みと捉えられる傾向にあった[16)]。しかし、デリダはある対談において、サルトルやメルロ＝ポンティが扱った「身体と精神という二領域」の両義性に学生時代、注力していたと述べている（JDE90-91/9）。われわれはそのようなデリダの問題関心を辿りつつ、差延や空間化＝間隔化といった時空間論とともに、本論で扱ったようなフッサールとハイデガーの再読解を経たデリダ独自の身体＝物体論の射程を勘案するべきだろう[17)]。本論では、初期の現象学との取り組みから晩年にまで続く Leiblichkeit という観点からデリダの議論を読解する方針を提示した。それらの展開についてこれ以上論じることはできないため別の機会に改めて論じたい。

文献略号表

デリダおよびハイデガーの以下のテクストの引用に際しては、以下の略号を用い、続けて、原著頁数と、邦訳がある場合には対応する邦訳頁数を記す。例えば（AE14/15）。また邦訳が複数巻にまたがって掲載されている場合にはローマ数字にて掲載順を記す。例えば（PSY437/134 Ⅰ）。引用中[……]は省略、〔〕内は引用者による補足を表す。

Jacques Derrida,

ED: *L'écriture et la différence*, Seuil, 1967 ／『エクリチュールと差異』合田正人、谷口博史訳、法政大学出版局、2013年。

IOG : *L'origine de la géométrie d'Edmund Husserl, Introduction et traduction*, PUF, 1962 ／エトムント・フッサール『幾何学の起源』田島節夫、矢島忠夫、鈴木修一訳、青土社、1976年。

JDE : « Jacques Derrida Entretiens du 1er juillet du 22 novembre 1999 » in Dominique Janicaud, *Heidegger en France Ⅱ* , Albin Michel, 2001 ／「ハイデガーをめぐる対談」西山達也訳、『現代思想』第43巻、第2号、青土社、2014年。

PSY: *Psyché. Inventions de l'autre*, Galilée, 1987 ／「Geschlecht ——性的差異、存在論的差異」（連載第一回・連載第二回）『理想』高橋允昭訳、第626号、第629号、理想社、1985年。

SM: *Spectres de Marx*, Galilée, 1993 ／『マルクスの亡霊たち』増田一夫訳、藤原書店、2007年。

TJ: *Le toucher, Jean-Luc Nancy*, Galilée, 2000 ／『触覚、ジャン＝リュック・ナンシーに触れる』榊原達哉、松葉祥一、加國尚志訳、青土社、2006年。

VP: *La voix et le phénomène, Introduction au problème du signe dans la phénoménologie de Husserl*, PUF, 1967 ／『声と現象』林好雄訳、ちくま学芸文庫、2005年。

Martin Heidegger,

SZ: *Sein und Zeit*, Max Niemeyer Verlag Tübingen, 1927 ／『存在と時間』（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）原佑、渡邊二郎訳、

中公クラシックス、2003年／ *Being and Time*, tr. John Macquarrie and Edward Robinson, Blackwell, 1962.

ML: *Gesamtausgabe, Bd. 26, Metaphysische Anfangsgr ̈unde der Logik im Ausgang von Leibniz*., hrsg. v. Klaus Held, Vittorio Klostermann, Frankfurt a. M., 1978 ／『論理学の形而上学的な始元諸根拠 ハイデガー全集 第26巻』酒井潔、ヴィル・クルンカ訳、創文社、2002年。

ZS: *Zollikoner Seminare: Protokolle Zwiegesprache Briefe*, hrsg. M. Boss, Vittorio Klostermann, Frankfurt a. M., 2 Aufl., 1994 ／『ツォリコーンゼミナール』木村敏、村本詔司訳、みすず書房、1991年。

註

1）晩年の『触覚——ジャン＝リュック・ナンシーに触れる』（2000）では初期の著作に遡りつつ、Leib を「固有の身体」と訳すことに対する疑義（あるいは自己批判）がなされていることにも注意を向けるべきである（TJ267/457）ただし、晩年のデリダの議論には、Leib のもう一つの系譜、chair の問題系がジャン・リュック＝ナンシー、メルロ＝ポンティの議論とともに密接にかかわってくる。そこでポイントとなるのは、デリダが両義的なものとして取り出した Leiblichkeit からメルロ＝ポンティを引き剥がすことである。そこで注目されるのは Leiblichkeit と区別される Leibhaftigkeit、そして肉 chair の系譜である。これに関しては一論文の射程としては膨大なものとなってしまうため、本論では 1960 年代のフッサール論から 1980 年代のハイデガー論における Leiblichkeit の主題に焦点をあてるにとどめたい。

2）ED253/339 以下を参照。

3）「ゲシュレヒトⅠ」はその名の通り Geschlecht という性、人種、種、類、血統、家族、世代、系譜、共同体などと訳される多義的な語であり、これを梃子としてハイデガーの脱構築的読解をデリダは仕掛けていく。「ゲシュレヒトⅠ」の延長線上には、「ゲシュレヒトⅡ——ハイデガーの手」（1986）、『精神について』（1987）があり、Geschlecht はその多義性のもとで多様な方向から読解がなされている。このデリダの「ゲシュレヒトⅠ」以降の方向性は、身体性を格下げした上で、根源的な統一的力動を担保しようとするフッサール＝ハイデガーに対する粘り強い批判でありそれ自体極めて豊穣なものだが、文字通りさまざま方向に散種される議論展開ゆえに Leiblichkeit という論点がみえにくくなってしまうことも否めない。本論ではそれゆえ議論を「ゲシュレヒトⅠ」に絞り議論を進める。

4）「肉」という主題も極めて重要であるが、これは注 1 の通り「ゲシュレヒトⅠ」以後、『精神について』などで展開されるハイデガー読解におけるプラトン的 Geistigkeit、キリスト教的 Geistlichkeit、トラークル的 Geistlichkeit を経由し、一性的原理である精神性への批判をおこなったのちに再度『触覚』において取り上げ直されるモチーフであり、本稿は肉の問題へいたる素描をおこなうものである。

5）エトムント・フッサール『論理学研究 2』立松弘孝、松井良和、赤松宏訳、みすず書房、1970 年、54-55 頁。「陳述が陳述しているもの、つまり三角形の三つの垂線は一点で交わるというこの内容は、生成消滅するものではない。わたしもしくはだれかが、この同じ陳述を同じ意味で表明するたびに、そのつど新たに判断されるのである。［……］しかし、判断作用が判断するもの、陳述が陳述しているものは、常に同じものである。それは厳密な語義において、同一のものであり、同一的な幾何学的真理なのである」。

6）この「問い返し」をデリダは question en retour と翻訳し、「距離を隔てた郵便による照会と調査〔la référence et la résonnance postale d'une communication à distance〕」、「遠隔コミュニケーション〔télécommunication〕」という後年のメディア論的表現とともに用いている（IOG36/47）。

7）原著では「*Das Transzendenzproblem und das Problem von Sein und Zeit*」と全文イタリックとなっているが、デリダはこれを「Le problème de la transcendance et le problème de *Sein und Zeit*」と訳し、後述する自身の『存在と時間』との連関を強調する読解方針を明確化している（PSY398/125 Ⅰ）。

8）『存在と無』における現存在にかんする身体、性的差異の欠如という点を主題化は重要であるが、この点に関してサルトルは単に事実性の水準において問題を提起したに過ぎず、ハイデガーの理論的構えに対する本質的な批判になっていないように思われる。ただし、デリダ自身は事実性の水準に理念的水準へと闖入する出来事性を見出そうとしていることも確かである。——Cf. 松田智裕「新たなものの出現としての出来事——デリダにおける出来事、偶然性、事実性をめぐって——」『フランス哲学・思想研究』第 20 号、日仏哲学会、2015 年。

9）ハイデガーの思索の根本語の一つである「アレーテイア」は「覆いをとる」という彼の真理観をあらわすために積極的に用いられる表現であるが、これは lethe の語頭に、否定の接頭辞 a- を付したものである。

10）デリダが指摘するように、Geschlecht、Geschlechtlichkeit という名詞は用いられているが、その多義性ゆえにこれらの語がもつセクシュアリティにかんする含意は曖昧なままである（PSY403/186 Ⅱ）。「ゲシュレヒトⅡ」においてゲシュレヒトの多義性それ自体をより主題化していったのはこのような曖昧なハイデガーのテクストへより深く踏み込むためであると考えられるだろう。

11）デリダはここで根源的な散在である Streuung に dissémination、Streuung の限定である Zerstreuung に dispersion という訳語をさしあたり割り振っているが、後述のように Zerstreuung の訳語に dissémination と dispersion をともに用いているなど、ここで厳密な使い分けがみられるわけではない。また、『論理学』の Heim による英訳は、Streuung を primodial bestrewal、Zerstreuung を dissemination と訳しているが、これは従来の Zerstreuung の訳 dispersion と異なるものである。Casey は、この Heim の訳語 dissemination をより分散性を強調する訳語であるとして自身の訳語として採用している——Cf. Casey, E. S. *The Fate of Place A Philosophical History*, University of California Press, 1997, p. 448.

12）例えばゲートマンが「本来性という概念の中に禁欲主義的で告発的な音調を聞き取るとすれば、それは完全にまちがいである」と述べるようにハイデガー解釈としては極めて異端である。——Cf. カール・フリードリッヒ＝ゲートマン「『存在と時間』におけるハイデガーの行為概念」『ハイデガーと実践哲学』吉本浩和訳、法政大学出版局、2001 年、186 頁。

13）伊藤は『存在と時間』、『論理学』の議論を踏まえつつ、ここでハイデガーがあくまで「現存在を多様化させる身体性」ではなく、現存在の中立的構造へ議論を集中させることにハイデガーの身体性に対する葛藤をみてとっている。——Cf. 伊藤良司、「ハイデガーにおける現存在の「身体性」の問題性格について」『哲學』第 122 号、三田哲学會、2009 年、45-65 頁、http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000122-0045（2017 年 6 月 20 日）。

14）注 4 の通り、デリダはハイデガーが持つ根源的統一性への傾向を、精神 Geist の問題の中に問うていくのだが、しかし、これはデリダが精神の問題を捨てたということを意味しない。本論の範囲を大きく

超えるが、精神 Geist は、ヴァレリー的精神 esprit を経由し、『マルクスの亡霊たち』で全面化する「一つならず〔plus d'un〕」の（あるいは「一つに満たぬ〔moin d'un〕」）亡霊 spectres の主題として別の形で積極的に引き受けられていく（Cf. SM21-27/22-30）。

15）この両義的な「界面 surfaces」という形象は、本論が取り扱った範囲での現象学読解においては全面化することはない。しかしながらデリダの精神分析解釈と合わせて考えた時、晩年の『触覚』において Leiblichkeit の問いとともに呼び出される「界面 surfaces」という形象に注目する必要を示唆しておきたい（Cf. ED331/450, TJ337/570）。

16）例えば、下記の訳者鼎談において加賀野井秀一はデリダの「幾何学の起源」読解について、「言語レベル」、「徹底して超越論的なもの、理念的なものを中心に考えていく」と述べている。——Cf. モーリス・メルロ＝ポンティ『フッサール「幾何学の起源」講義』加賀野井秀一、伊藤泰雄、本郷均訳、法政大学出版局、2005 年、p. 566。

17）そして、このような身体＝物体論的主題は、晩年、明確にモノと肉との絡み合うテクノロジーという主題として語り直されることとなるものである（Cf. TJ337-338/570-572）。身体と両義性というメルロ＝ポンティ的なテーマが展開される『触覚』について、すでにいくつか研究がなされている。とりわけメルロ＝ポンティのテクストと並置しながら詳細にデリダの読解を検討したものについては以下を参照。——Cf. 加國尚志『沈黙の詩法　メルロ＝ポンティと表現の哲学』、晃洋書房、2017 年、pp. 117-134。ただし、デリダ読解の観点からは本論が提示したデリダの初期からの哲学的企図の変遷に位置付け、身体＝物体論的主題を再検討する必要があるだろう。

Leib comme surfaces entre la dissémination et l'organisation
——Leiblichkeit chez Derrida——

Ayuto OGAWA

« Leib » est une notion souvent traduite comme le « corps propre », mais semble être un sujet problématique pour Derrida, qui a critiqué le présent vivant comme la base de l'évidence phénoménologique. En effet, « Leiblichkeit » reste un terme ambigu pour Derrida. Dans notre article, nous montrerons en premier lieu que la notion de «Leiblichkeit» se situe entre la « facticité » et le « transcendantalisme », en opposition avec la séparation de « Geist » et de « Leib » décrite dans son introduction à *L'origine de la géométrie et Voix et Phénomène*. Dans un dernier temps, nous décrirons comment le problème de « Leiblichkeit » fonctionne comme un point nodal ambivalent de différenciation et d'organisation dans *Geschlecht, différence sexuelle, différence ontologique*.